

## つながりを生み出す図工ワークショップの実践と考察Ⅱ

——2020年度の実践を中心に——

佐 伯 育 郎\*

Art Workshops to Forming Connection with Someone II: Focusing on Art Workshops in 2020

Ikuo SAEKI\*

### はじめに

筆者は、図画工作専修・ゼミの学生<sup>註1)</sup>とともに図工ワークショップを毎年企画・実施している。図工ワークショップの根底にあるテーマは「架橋」つまり「つながり」である。

2019年度の拙稿では、学外2回(5月・8月)、学内1回(12月)の2019年度(令和元年度)における図工ワークショップについて考察し、取組を通して生み出すことができた様々なつながりについて具体的に言及した<sup>註2)</sup>。

続く本稿では、2020年度(令和2年度)に行われた学外3回(7月・9月・12月)の図工ワークショップの実践に関する省察をもとに、どのような架橋を試みたのか、その結果どのようなつながりが深まったのか、検証することを目的とする<sup>註3)</sup>。読者各位の忌憚のないご批評を賜りたい。

### 1. 安芸高田市立八千代の丘美術館との架橋 ～美術作家として

筆者は、教育・研究活動の一環として、油彩画を中心とした作品制作・発表を行っている。この度、安芸高田市立八千代の丘美術館の2020

年度(令和2年度)・第19期入館作家12人のうちの1人として選出して頂き、2020年(令和2年)4月1日から2021年(令和3年)3月14日までの1年間を通して、展示室・アトリエ棟Mにおいて、洋画の作家として作品が展示される運びとなった<sup>資料1)</sup>。2001年度(平成13年度)に開館した八千代の丘美術館は、広島県内を中心に活動する作家が毎年入れ替わりながら、1年間に



【資料1：安芸高田市立八千代の丘美術館 2020年度リーフレット】

\* 本学教授

渡って個展を開催するという非常に稀有な美術館である<sup>写真1)</sup>。

筆者がこれまで光風会展や日展で発表してきたF100号サイズ(130.3×162 cm)の油彩画を中心に、油彩画の小品・水彩画・版画・写真・染色・陶芸などの作品を3期に分けて展示した。筆者以外の第19期入館作家には、洋画7人、日本画2人、金属造形1人、前衛書道1人が入館作家選定審査会により選出された。期間中は、別の作家による特別展も併催された<sup>註4)</sup>。

当初、2020年(令和2年)4月1日から7月31日までの1シーズン、2020年(令和2年)8月1日から11月30日までの2シーズン、2020年(令和2年)12月1日から2021年(令和3年)3月14日までの3シーズンに渡って展示をする予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響によって1シーズンの開始が遅れ、2020年(令和2年)5月20日からの開催となった。イベントも変更を余儀なくされた。4月25日(日)に予定していた春祭り(入館作家交代式やギャラリートークなどを予定)も中止となったが、8月2日(日)の夏祭り、12月6日(日)の冬祭りは予定通り実施することができた。筆者は、入館作家の1人として夏祭り、冬祭り、ワークショップにおいて計4回のギャラリートークを行った<sup>写真2)</sup>。自身の作品テーマの紹介、展示作品についての解説を実施した。1年間という長期間の展示は、筆者初めての経験であった。展示室において来場者の方から作品に対する感想を直接お聞きすることもあり、自身の制作活動について見つめ直すきっかけにもなった。通常の展示に加えて、夏祭りなどのイベントへの参加を通して、来場者の方、他の入館作家とも交流することができ、筆者にとって貴重な体験となった。広島市の中心部からは遠方の美術館であり、移動に気を遣う時期であっ

たにも関わらず、ご来場ご高覧頂いた方々には深く感謝する次第である。

## 2. 安芸高田市立八千代の丘美術館との架橋 ～美術教育実践家として：八千代の丘美術館とのコラボレーション・ワークショップ①「たのしくポスターを描こう」

### (1) 題材と概要

入館する作家の条件の1つとして、展示期間中に市民向けのワークショップ(公開講座)の開催がある。例えば、安芸高田市立の小・中学校に出向いての出張指導、八千代の丘美術館でのワークショップなど、入館作家の専門分野や特長を活かして地域貢献活動、芸術・文化の振興活動を行うことになっている。そこで、筆者は計3回のワークショップを担当することになった。その1回目が2020年7月26日(日)に実施した「たのしくポスターを描こう」である。入館作家の1人である洋画家・栗原誠子(C棟)と筆者が共同で指導・支援を行った。交通安全や環境保全など、様々なテーマのポスター制作である。題材であるポスター制作は、八千代の丘美術館からの提案・依頼により設定したものであり、例年行われているプログラムの1つである。安芸高田市教育委員会が発行している「学びの夏」という小冊子にも、ワークショップの案内を掲載して頂いた<sup>資料2)</sup>。この冊子は、夏休みの宿題に活用されている。ポスターのワークショップは、各種コンクールへの出品にも活用されており、安芸高田市立の小学校校での教育活動とのつながりを意識した取組といえるだろう。

主な指導を担当した筆者は、PowerPointによるスライドショー(全39ページ)を事前に作成し、当日はプロジェクターで会場壁面に投影し



【資料2：「たのしくポスターを描こう」の案内】

ながら説明を行い、進行した。ポスターの構想をまとめるためのA3サイズ1枚のワークシートも用意し、参加者に活用して頂いた。参加者への指導・支援については、2人の講師で協働して行った。新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、定員を10人に絞っての募集となった。当日は密になるのを避けるため、午前（10：00～12：30）と午後（13：30～16：00）の2回実施した。午前は10人<sup>写真3）</sup>、午後は3人<sup>写真4）</sup>、小学校1年生から5年生までの参加者があった。当日のプログラムは表1の通りであ

【表1：「たのしくポスターを描こう」当日プログラム】

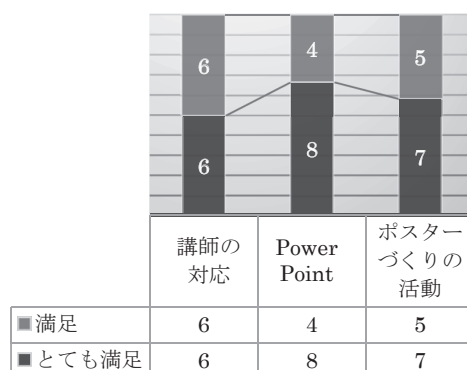
1	はじめのごあいさつ、ギャラリートーク	10分
2	<p>今日のめあて</p> <p>①ポスターが、どのようなものかまなぼう。</p> <p>②ポスターのつくりかたをまなぼう。</p> <p>③できるところまでポスターをえがこう。</p> <p>ポスターってどんなもの？</p> <p>ポスターのつくりかた</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. なにをつたえるか、かんがえる。</li> <li>2. つたえる・つたわることをかんがえる。</li> <li>3. どんな絵（え）がいいか、かんがえる。</li> <li>4. たて、よこ、どっちがいいか、かんがえる。</li> <li>5. えんぴつで、したがきをする。</li> <li>6. 色（いろ）をぬって、しあげる。</li> </ol> <p>今日のまとめ</p>	130分
3	おわりのごあいさつ、記念写真の撮影、アンケート回答・提出	10分

る。八千代の丘美術館では、どのワークショップにおいても、開始時には館長による講師の紹介、講師をつとめる作家の展示室に移動してのギャラリートークは行われているようであり、筆者らも同様であった。

制作時の導入では、ポスターとはどのようなものか、例を示すとともに、ポスターに必要な要素についてPowerPointに取り上げ、学習した。その後、ポスター制作の手順を6工程に分け、参加者の様子を見ながら概ね2工程ずつ制作を進めた。

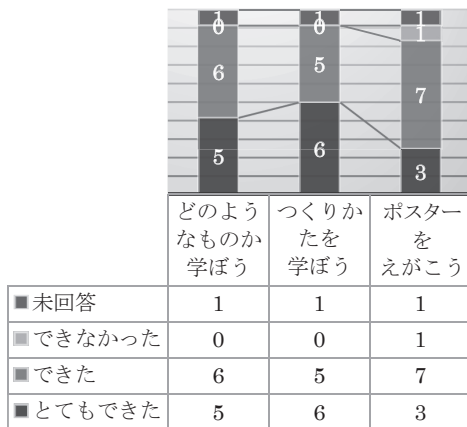
## (2) 成果と課題

参加者には、終了時にA4サイズ1枚のアンケートに回答して頂いた。ワークショップの満足度について質問した。「とても満足 満足 不満 とても不満」の4段階で回答して頂いた。評価の理由も、自由記述して頂いた。参加者の小学生にとって回答が難しい設問については、同席されていた保護者の方に援助して頂いた。13人中12人の回答があり、結果はグラフ1のようになった。理由としては、例えばPowerPointを活用しながら丁寧に教えてくださったからという肯定的な記述が見られた。家庭では集中して描くことが難しいが、講師からヒントをもらいながら楽しく描けたという記述もあった。



【グラフ1：「たのしくポスターを描こう」の満足度】

次に、ねらいの達成度についても質問した。「とてもできた できた できなかった まったくできなかった」の4段階で回答して頂いた。回答の結果は、グラフ2のようになった。理由としては、主役・脇役、大小を踏まえて描くこと、色の合わせ方、絵の具の使い方などを教えて頂き、今後にも活かそうだという回答があった。できなかったという回答もあったが、理由は時間不足によって完成に至らなかったからというものであった。



【グラフ2：「たのしくポスターを描こう」のねらいの達成度】

成果としては、アンケート結果にも表れていたように、筆者らの指導・支援は概ね高評価であったことが挙げられる。この他、美術館との協働であった点、他の作家とのチーム・ティーチングであった点なども成果として挙げられよう。筆者自身も新鮮であり、取組に対して肯定的な印象を持つことができた点も大きかった。参加者はマスクを着用し、筆者らもマスクとフェイスシールドを着用しての指導となった。定員も、通常より少なくしての開催であった。その結果、何よりも安全に実施できたことが、大きな収穫であった。

課題としては、150分という長時間を確保して

いたものの、小学生にとっては四つ切りサイズ(545×393 mm)のポスターを構想・描画・着色を経て完成させることは難しいということが挙げられた。一般的にポスターは、小学校高学年や中学生で数時間かけて制作されることが多い題材である。ワークショップの参加者は、小学校1年生3人、2年生3人、3年生4人、5年生3人という内訳であり、はじめてのポスター制作という方も少なくなかった。少人数ではあったが、児童の年齢・発達段階が幅広く、指導の難しさ、筆者の指導力不足を痛感した。午前と午後とで参加者数に偏りがあった点も課題であった。参加者のご都合であり仕方ないことではあったが、指導側としてはできれば午前と午後で均等化したかったというのが正直な感想であった。

課題も少なくなかったが、後日(冬祭りでのワークショップにおいて)このワークショップに参加した方からコンクールに入賞したことを教えて頂き、思いがけぬ収穫となった。筆者自身学びの多い経験となった。

### 3. 安芸高田市立八千代の丘美術館との架橋 ～美術教育実践家として：八千代の丘美術館とのコラボレーション・ワークショップ②「身近な材料でフクロウをつくろう!!」

#### (1) 題材と概要

2回目のワークショップは、2020年(令和2年)9月27日(日)に実施した「身近な材料でフクロウをつくろう!!」である(資料3)。当初は9月6日(日)に予定していたが、台風10号の影響により順延となった。

筆者は、かねてから鳥をモチーフとした作品制作を行ってきた。鳥の中でも、猛禽類、とりわけフクロウをモチーフとした油彩画を中心と



### 八千代の丘美術館 ワークショップ

ニューズペーパー『カリグラフィー講座』  
さいだんめん  
新聞紙の裁断面を筆に  
しよけい もじ  
象形文字を書いてみよう！

■日 時 令和2年8月23日(日) 11:00~12:30  
■会 場 八千代の丘美術館研修室  
■定 員 10名  
■対 象 未就学児~大人(低学年まで保護者同伴)  
■参加費 1000円(別途入館料が必要)  
■持参物 墨を入れるための深さ3cm位の器

■講 師 藤村 満彦 先生 <前南書道>  
八千代の丘美術館第19期入館作家  
現在、M棟にて作品展示中

参加希望の方は、八千代の丘美術館までお電話でお申し込みください。定員になり次第締め切ります。

### 身近な材料でフクロウをつくろう!!

シアワセを運ぶフクロウを作って、お部屋に飾ろう♪

■日 時 令和2年9月6日(日)  
13:30~15:30  
■会 場 八千代の丘美術館研修室  
■定 員 10名  
■対 象 未就学児~大人  
(低学年まで保護者同伴)  
■参加費 300円(別途入館料が必要)  
■持参物 トイレットペーパーの芯2本

■講 師 佐伯 育郎 先生 <洋画> 八千代の丘美術館第19期入館作家  
現在、M棟にて作品展示中

参加希望の方は、八千代の丘美術館までお電話でお申し込みください。定員になり次第締め切ります。

お申込み・お問い合わせ  
TEL (0826) 52-3050

〒731-0202 安芸高田市八千代町藤田 10404-7 開館時間 10:00~17:00 休館日/火曜日  
入館料/一般 300円・小中学生 200円・65歳以上 200円・障害者手帳をお持ちの方(年齢者1名を含む)無料  
主催/安芸高田市教育委員会・八千代の丘美術館

#### 【資料3：「身近な材料でフクロウをつくろう!!」掲載のチラシ】

しつつ、水彩画・版画・染色・陶芸などの作品を制作・発表してきた。3期に渡る展示においても、フクロウの作品が陳列の多くを占めている。筆者は、展示作品とワークショップの題材との関連性を重視したいと考えた。そこで、ワークショップの題材としてフクロウの作品づくりを筆者主導で企画し、美術館側に提案した結果、採用された。2020年度・前期の授業、教科教育学演習Ⅲ・幼児教育学演習Ⅲにおいて、非対面授業と対面授業とを併用しつつ図画工作専修・ゼミ3年生10人と筆者によって教材研究を行った。教材研究の結果、紙コップ、トイレットペーパーの芯、新聞紙などを用いたフクロウの作品が候補に挙がり、最終的にトイレットペーパーの芯を主材料としたフクロウに絞り込んだ<sup>写真5)</sup>。筆者自身も学生とともに教材研究を行い、参考作品を制作した<sup>写真6)</sup>。ワークショップ当日に参加する4年生も、夏季休業中

に参考作品を制作した。図画工作専修・ゼミ生と筆者が制作したフクロウの参考作品は、ワークショップの宣伝も兼ねて一定期間ではあったが美術館内に展示して頂いた。

表2は、これまでの図工ワークショップの実践を通して導き出した教材研究・題材開発の手順である。今回もこの手順に従って教材研究を進め、作品のコンセプト(概念、方向性、基本となる性格付け)を探った。特に「3 対象者に合わせて最終形にまとめる。」については、色画用紙でフクロウのパーツを切る時、カッターナイフを使わず、ハサミを使うように配慮したことへとつながった。

【表2：教材研究・題材開発の手順・過程】

順序	教材研究・題材開発の方法
1	試作を通して、基本形を明らかにする。
2	他の方向性を探り、可能性を広げる。
3	対象者に合わせて最終形にまとめる。

教材研究を通して明らかにしたフクロウのコンセプトは、表3の通りである。トイレットペーパーの芯の先端(フクロウの頭部)を凹ませると、ミミズクの羽角を再現できるため、フクロウとミミズク、参加者の好みに応じていずれかを選択できるようにした。

【表3：フクロウのコンセプト】

1	フクロウかミミズクかを参加者に選択させる。
2	土台となる身体の部分にトイレットペーパーの芯を用いる。
3	顔や翼、尾や脚、装飾には色画用紙などを用いる。
4	吊り下げるためにモール、ダンボール片を用いる。

当日のプログラムは表4の通りである。主たる進行と指導は、筆者が行った。図画工作専修4年生2人も補助指導者として参加した。マスクとフェイスシールドを着用し、3人で協働して指導・支援を行った。

【表4：「フクロウをつくろう!!」当日プログラム】

1	はじめのごあいさつ、ギャラリートーク	10分
2	<p>今日のめあて</p> <p>①フクロウが、どのようなとりかまなぼう。</p> <p>②ペーパーのしんで、フクロウをつくろう。</p> <p>③すきなところで、フクロウのしゃしんとろう。</p> <p>フクロウってどんなとり？</p> <p>フクロウクイズ①～⑤</p> <p>フクロウのつくりかた</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. フクロウかミミズク、どっちかえらぼう。</li> <li>2. しんをつかって、からだをつくる。</li> <li>3. いろがようしで、はねをつくる。</li> <li>4. からだにはねをくっつける。</li> <li>5. かおとおなかをつくる。</li> <li>6. あし、モールをつけて、かんせい！</li> </ol> <p>フクロウとそとへでて、しゃしんとろう！</p> <p>記念写真の撮影</p> <p>今日のまとめ・今日のおまけ・今日の先生</p>	100分
3	おわりのごあいさつ、アンケート回答・提出	10分

筆者は、PowerPointによるスライドショー（全50ページ）を事前に作成し、当日はプロジェクターで会場壁面に投影しながら説明を行い、制作を進めた。導入では、フクロウとはどのような鳥か、5問のクイズを通して学習した。その後、フクロウ制作の手順を6工程に分け、参加者の様子を見ながら2工程ずつ制作を進めた（写真7）。

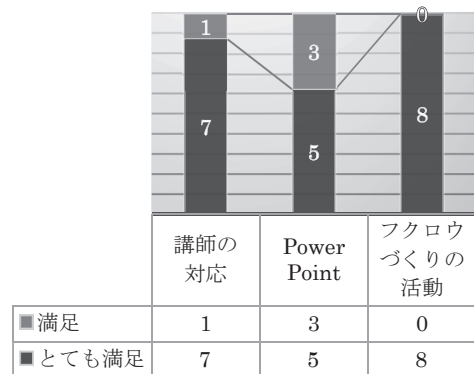
参加者は、親子で協力しながら個性的な作品を作り上げていった（写真8）。作品が完成したら、美術館の中庭に出て、芝生の上など好きな場所に作品を置き、スマートフォンなどで各自撮影を行った（写真9・10）。参加者全員で記念撮影をした後（写真11）、ワークショップ会場に戻り、今日のまとめを行った。まとめでは、今日のめあてが達成できたかどうか参加者に問い掛けた。今日のおまけでは、発展編として紙コップで作るタイプのフクロウを紹介した。今日の先生では、筆者が幼少期に作成した鳥の図鑑を紹介して、子

どもの頃に興味を持ったことを大人になっても大切にしたいと参加者にメッセージを伝えて、終了した。

## (2) 成果と課題

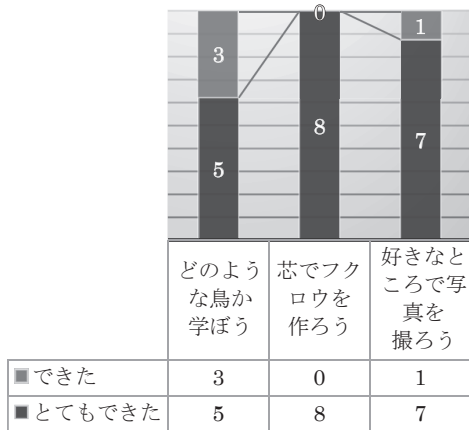
参加者には、終了時にA3サイズ1枚のアンケートに回答して頂いた。参加者11人中8人の回答であった。まず、ワークショップの満足度について質問した。「とても満足 満足 不満 とても不満」の4段階で回答して頂いた。評価の理由も自由記述して頂いた。結果はグラフ3の通りである。

理由としては、筆者らの説明、PowerPointもわかりやすく、楽しく作ることができたからという回答が多かった。アンケート結果を見る限り、不満な点は特に認められなかった。



【グラフ3：「身近な材料でフクロウをつくろう!!」の満足度】

次に、ねらいの達成度についても質問した。「とてもできた できた できなかった まったくできなかった」の4段階で回答して頂いた。回答の結果は、グラフ4のようになった。理由としては、フクロウとミミズクの違いについて知ることができた、羽角について知ることができた、先生たちと楽しく話することができた、楽しくフクロウを作ることができたといった肯定的な回答が散見された。



【グラフ4：「身近な材料でフクロウをつくろう!!」のねらいの達成度】

成果としては、アンケート結果にも表れているように、筆者らの指導・支援は概ね高評価であったことが挙げられる。ワークショップの参加者は、年長1人、小学校2年生1人、3年生4人、4年生3人、大人2人という内訳であった。今までのワークショップでは、作品の作り方を図示したプリントを用意していたが、プリントがなくてもPowerPointを活用し、2工程毎に説明をすれば、発達段階や年齢に幅はあっても無理なく制作できるということが分かった。保護者による支援はもちろんだが、補助指導者として参加した図画工作専修4年生とも連携を取ることができた。4年生2人にとっては卒業後小学校現場に立つ時の練習にもなった。美術館との協働でありながらも、学内における普段のゼミ活動とも往還することができた点も収穫であった。ワークショップ終了後、その報告も兼ねて、後期における2年生の教育学研究Ⅱ、3年生の教科教育学演習Ⅳにおいても図画工作専修・ゼミの学生とともにフクロウの作品制作をすることができた。当日に参加できなかったゼミ生も少なくなかったが、ワークショップでの学びを共有することができた。

ワークショップ当日、感染対策を講じること

で、無事実施することができたことが何よりも大きな収穫であった。

課題としては、補助指導者としてのゼミ生の参加人数を増やすべきだったのではないかと省察した。小学校教員採用試験受験後の4年生だけでなく、他学年のゼミ生も数名導入すべきだったのではないかと考えた。本来は4年生が3人参加する予定だったが、順延したことによって1人の都合が合わなくなった。参加者の定員が少なかったとはいえ、あと2人くらいは参加させてもよかったのではないだろうか。ワークショップへの参加が貴重な学びの機会となったのではないかと反省した。

#### 4. 安芸高田市立八千代の丘美術館との架橋 ～美術教育実践家として：八千代の丘美術館とのコラボレーション・ワークショップ③「ツリースをつくろう!」

##### (1) 題材と概要

2020年12月6日(日)には、八千代の丘美術館において冬祭りが開催された。冬祭りでは入場無料になる他、入館作家によるギャラリートークの他、ワークショップが3本開催された。そのうちの1つ『「ツリース」をつくろう!』を筆者と図画工作専修・ゼミ学生6人とで担当した<sup>資料4)</sup>。

ツリースとは、「ツリー+吊り+リース」の意味であり、クリスマスツリーの形をしたリースのことである。2010年度の学内における図工ワークショップの題材である(表9参照のこと)。今回は、そのツリースを改良して題材化することにした。2010年度のツリースでは、主材料であるダンボールをカッターナイフで切ってツリーの形を作る工程が含まれていた<sup>註5)</sup>。冬祭りでのワークショップ参加者には就学前の幼児

作る楽しさの体験 + アートな日常

**八千代の丘美術館 ワークショップ**

**12/6(日) 木の実を使って「クリスマスリース」を作ろう!**

■日 時 令和2年 12月 6日 (日) 10:30~12:00  
 ■会 場 八千代の丘美術館研修室  
 ■定 員 15名  
 ■対 象 未就学児~大人 (低学年まで保護者同伴)  
 ■参加費 100円 ■持参物 はさみ  
 ■講 師 佐々木 直子  
 ☆中塚 敬子 先生【洋画】現在、F棟にて作品展示中  
 ☆中塚 敬子 先生【洋画】現在、D棟にて作品展示中  
 ※参加希望の方は、八千代の丘美術館までお電話でお申し込みください。  
 定員になり次第、締め切ります。



---

**段ボールや色画用紙で作るツリー型のリース 『ツリース』をつくろう!**

■日 時 令和2年 12月 6日 (日) 13:30~15:00  
 ■会 場 八千代の丘美術館研修室  
 ■定 員 15名  
 ■対 象 未就学児~大人 (低学年まで保護者同伴)  
 ■参加費 200円 ■持参物 なし  
 ■講 師 佐々木 直子 先生【洋画】  
 現在、M棟にて作品展示中  
 ※参加希望の方は、八千代の丘美術館までお電話でお申し込みください。  
 定員になり次第、締め切ります。



---

**自然の実を使って工作しよう**

木の葉がフクロウや  
まっくろくすけに登場!!

■日 時 令和2年 12月 6日 (日) 10:00~16:30  
 ■会 場 八千代の丘美術館市民ギャラリー  
 (3密防止のため、人数制限あり)  
 ■対 象 未就学児~大人 (低学年まで保護者同伴)  
 ■講 師 佐々木 直子 さん



安芸高田市立八千代の丘美術館

お申込み・お問い合わせ  
 TEL (0826) 52-3050  
 〒721-0202 安芸高田市八千代町緑田 1004-7 開館時間 10:00~17:00 休館日 火曜日  
 入館料: 一般 300円・小学生 200円・65歳以上 200円・障害者手帳をお持ちの方 (介護者1名を含む) 無料  
 主催/安芸高田市教育委員会、八千代の丘美術館

【資料4:「『ツリース』をつくろう!」掲載のチラシ】

も見込まれることから、カッターナイフを使わないで完成させる方法を検討した。2年生の教育学研究Ⅱ、3年生の教科教育学演習Ⅳ・幼児教育学演習Ⅳで教材研究を行い、参考作品を作った。その結果、あらかじめダンボールでできた木と鉢のパーツを切っておき、ワークショップ参加者に選ばせて、枝に見立てたモールでつないでツリースを作る方法を開発した<sup>写真12)</sup>。切る用具はハサミのみを用いるように改良した。この他、ワークショップ当日、共同制作を行うための大きなツリースも、プラスチックダンボールを用いて2つ制作した。筆者も、園芸用のオベリスクを蛍光グリーンで塗装して大きなタツリー(立つ+ツリー)に改造した。2010年度版と2020年度版との比較表<sup>表5)</sup>、2020年度版ツリースのコンセプト<sup>表6)</sup>は以下の通りである。

当日のプログラムは表7の通りである。PowerPointによるスライドショー(全52枚)の

【表5:2010・2020年度の題材「ツリース」比較表】

実施年度・場所	主な材料	主な用具	主な作り方
2010 学内	ダンボール色画用紙・モール	カッター・ナイフのり	ダンボールをカッター・ナイフで切る
2020 学外	ダンボール色画用紙・モール	ハサミのり	切っただんボールを選び、モールでつなげる

【表6:2020年度版ツリースのコンセプト】

1	ダンボールでできた木と鉢のパーツを参加者に選択させる。
2	幹に見立てたモールで、木と鉢をつなぐ。
3	装飾には色画用紙などを用いる。
4	吊り下げるためにモールを用いる。

【表7:「ツリースをつくろう!」当日プログラム】

1	はじめのごあいさつ・教員と学生の自己紹介	5分
2	今日のめあて ①ダンボールやいろがようしなどで、ツリースをつくろう。 ②おおきなツリースを、みんなでかざろう。 ③おおきなタツリーにみんなのツリースをかざって、しゃしんをとろう。 ツリースのつくりかた 1. すきなかたちのダンボールをえらぼう。 2. すきないろがようしをえらぼう。 3. いろがようしで、きをつくる。 4. いろがようしで、はちをつくる。 5. きとはちを、モールでつなげる。 6. モール、かざりをつけて、かんせい! M棟に移動し、タツリーにツリースを飾って撮影 美術館中庭で記念写真の撮影 今日のまとめ・今日のおまけ	80分
3	おわりのごあいさつ、アンケート回答・提出	5分

作成と操作は筆者が行ったが、司会役の図画工作専修・ゼミ3年生2人が進行を行った。その他、図画工作専修・ゼミ3年生2人、2年生2人が補助指導者として参加した。全員マスクと

フェイスシールドを着用し、筆者も含め7人で協働して指導・支援を行った。ワークショップ開始前には、2年生2人が美術館入口で来場者に対する検温係もつとめた。

制作時の導入では、筆者と学生の自己紹介を行い、2020年度版ツリースの参考作品を見て頂いた。その後、ツリース制作の手順を6工程に分け、参加者の様子を見ながら2工程ずつ制作を進めた。会場設営については美術館側で既にセッティングしてくださっており、コの字の配置となっていた。

参加者は、親子で協力しながら多様なツリースを作り上げていった<sup>写真13</sup>。筆者らも机間指導によって支援を行った。作品が完成したら、ワークショップ会場正面に掲示していた2つの大きなツリースに、白や蛍光色の色画用紙、マスキングテープなどで装飾して頂いた<sup>写真14</sup>。参加者と学生による共同制作として設定した活動である。

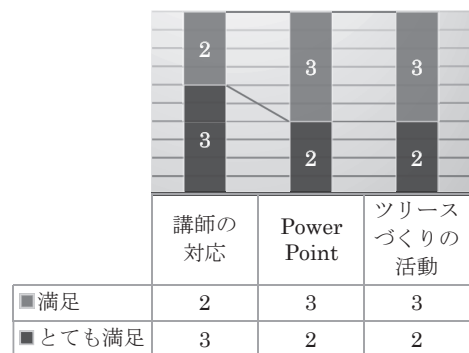
作品が完成したら、全員で筆者の展示室M棟へ移動した。展示室中央に設置していた大きなタツリーに各自のツリースをS字フックで吊り下げた。その後、消灯し、LEDライトやブラックライトでタツリーを点灯し、スマートフォンなどで各自撮影を行った<sup>写真15</sup>。美術館中庭に移動し、参加者全員で記念撮影をした後<sup>写真16</sup>、ワークショップ会場に戻り、今日のまとめを行った。まとめでは、今日のめあてが達成できたかどうか参加者に問い掛けた。今日のおまけでは、カッターナイフが使えるようになったら作れる2010年度版のツリース、立たせるタイプのツリー（タツリー）の写真を見て頂き、クリスマスツリーの作り方には他の方法もあることを紹介した後、終了した。

## (2) 成果と課題

参加者には、A3サイズ1枚のアンケートに回答して頂いた。参加者16人中5人の回答であっ

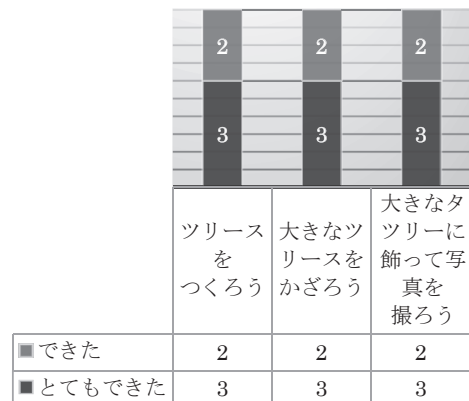
た。まず、ワークショップの満足度について質問した。「とても満足 満足 不満 とても不満」の4段階で回答して頂いた。評価の理由も自由記述して頂いた。結果はグラフ5の通りである。

理由としては、学生による説明、PowerPointもわかりやすく、優しく教えてくれたからという回答が多かった。アンケートの回収率は低かったが、結果を見る限り、不満な点は認められなかった。



【グラフ5：「『ツリース』をつくろう!」の満足度】

次に、ねらいの達成度についても質問した。「とてもできた できた できなかった まったくできなかった」の4段階で回答して頂いた。回答の結果は、グラフ6のようになった。アンケートの回収率は低かったが、評価そのものは比較的高かった。



【グラフ6：「『ツリース』をつくろう!」のねらいの達成度】



成果としては、アンケート結果にも表れていたように、筆者らの指導・支援は概ね高評価であったことが挙げられる。筆者は、図工ワークショップにおける指導・支援のあり方を表8のようにまとめている。図工ワークショップには、事前に子どもの実態がわかっている通常の保育・授業とは異なる難しさがある。この原則をもとに実践を進めると、参加者・指導者双方の抵抗を軽減でき、満足度も高まると考えている。指導者である学生にはスタッフ用配付資料の一部として事前に伝え、当日に備えた。学生の支援・対応が奏功したのではないかと推察する。2年生2人については子どもと関わる機会が少なかったが、3年生が2年生をサポートする場面もあり、学年を越えた交流も認められた。3年生については、9～11月に行われた教育実習Ⅱ・Ⅲ（小学校）の時よりも、子どもとの接し方に違いが見られ、成長を感じることができた点も収穫であった。

【表8：図工ワークショップにおける指導・支援の在り方三原則】

原則	指導・支援の具体的な方法
1	子どもにできることはさせて、できないことは手助けする。
2	予想外のことには、臨機応変に対応する。
3	同時に作品を作るなど、伝わりやすい工夫をする。

題材であるツリースは、季節・行事にも合っていたため、参加者の動機付けも高めやすいものであったと考える。ワークショップの参加者は、年中1人、年長1人、小学校1年生2人、2年生2人、3年生5人、4年生2人、5年生1人、大人2人という内訳であった。15人の定員を上回る応募があった。ポスターやフクロウのワークショップに参加された方の参加もあった。フクロウの時と同様、作り方のプリントが

なくてもPowerPointを活用し、2工程毎に説明をすれば、無理なく制作することができた。図工ワークショップの準備内容は多岐に渡る。学びになる分、筆者・学生の負担も大きいのだが、プリントを作成しなくても成立することが分かった点は収穫であった。保護者による支援はもちろんだが、補助指導者として参加した図画工作専修・ゼミ6人とも連携をすることができた。コの字型の会場設定も、筆者らが支援しやすい配置であった。カッターナイフを使う場面もなかったため、より安全に制作を進めることができた。2010年度版ツリースの課題を克服・改善し、2020年度版ツリースを提案することができた。

ワークショップ終了後、その報告も兼ねて、後期における2年生の教育学研究Ⅱ、3年生の教科教育学演習Ⅳにおいても図画工作専修・ゼミの学生とともに大きなツリースとタツリーのイルミネーションをすることができ、ワークショップでの学びを共有することができた。

ワークショップ当日、感染対策を講じることで、無事実施することができたことが何よりも大きな収穫であった。当初は、もっと多くのゼミ生を参加させる予定であった。ワークショップへの参加時間を半分にして交代制にする予定であった。関係各所と相談し、密になることを避け、安全性を高めるため、ワークショップ直前に参加学生の人数を大幅に削減した。残念ではあったが、無事終えることができたため、やむを得ない対応であったと考える。

課題としては、終了後に実施したアンケートの回収率が低かったことが挙げられる。90分という時間設定はツリースを完成させるには無理がないものであったが、その後のアトラクションも含めるとフクロウの時と同様に120分が適していたのではないかと省察した。時間配分がア

ンケート回収率にも影響したのではないかと考える。アトラクションについては、展示室内が想定していたよりも明るかったため、LEDライトやブラックライトの効果が低かった点も課題であった。美術館には暗幕も保管してあったため、事前にお借りするべきであったと省察した。ワークショップ終了後のゼミにおいて学内で検証すると、暗幕を用意した方がより綺麗に点灯させることが改めて分かった。

参加学生6人には現地に集合させ、美術館で合流した。今回参加した6人は、各学年のゼミ代表者、自宅が美術館に比較的近い学生を選出した。それでも交通の利便性が低い立地であったため、必ずしも参加しやすいとはいえなかった。しかし、ワークショップ後のゼミでの振り返りでは、参加した学生から参加して楽しかった、適切な学生数であり子どもに対する指導もよい経験になったという発言が認められた。今後も、同様の取組を前向きに検討していきたい。

## 5. 2020年度の実践で生まれたつながり

本稿では、2020年度（令和2年度）に行われた学外3回の図工ワークショップの実践に関する省察を行った。筆者らがどのような架橋を試みたのかは、以下の通りである。

### 【2020年度で試みた架橋】

#### ①美術館との架橋

#### ②地域との架橋

①については、既に言及した通りである。筆者の展示は2021年3月中旬で終了となるが、今後も八千代の丘美術館との架橋を継続していきたい。②についても従来から行ってきたが、特に安芸高田市とのつながりが強化されたのではないかと筆者は考える。本学教育学部教育学科では、2019年度から1年次後期の授業「児童の理解」において安芸高田市の小学校に学生が年

に2回程見学にうかがっている。筆者らのワークショップにも、安芸高田市の小学生が多数参加してくださっており、安芸高田市という地域との架橋が以前にも増して実現できたのではないかと実感した。

2020年度（令和2年度）の取組の結果、どのようなつながりが深まったのか、筆者なりにまとめると次のようになる。

### 【2020年度で深まったつながり】

#### ①大学と地域とのつながり

#### ②実践同士・ゼミ内のつながり

①については、これまでに考察に加えて、次のことも挙げられる。安芸高田市立八千代の丘美術館は「……単なる展示施設を越えて、作家と地域が一体となり、より深く文化・芸術を地域に浸透させていく役割を担っております。美術館による文化的な広がりとは本市にとどまらず、行政区域を越えての効果が期待できるものと考えております。」<sup>[引用1)]</sup>「開館以来今日まで安芸高田市の芸術文化の拠点として、さらには町づくりの要として市民に愛される美術館であると同時に、学校教育、生涯学習を含めた教育の場として貴重な施設となっています。」<sup>[引用2)]</sup>と述べられており、筆者も同意見である。これまで鑑賞者の一人として訪れていたが、入館作家として深く関わったことで、このことを実感した。筆者と図画工作専修・ゼミ学生は安芸高田市の出身ではないが、地域を越えて大学とのつながりが深まったのではないかと考える。フクロウとツリースの参加者用アンケートでは、また身近な材料を使った作品づくりのワークショップに参加したいかという設問に対して、「参加したい参加したくない」の2択で回答して頂いた。回答した頂いた方13人全員が参加したいと回答した。課題・反省点はあるものの、前述のような役割を、2020年度（令和2年度）の筆者ら取組

が微力ながら果たすことができたのではないかと前向きに捉えている。

②についても、本稿で言及してきた通りである。過去の題材を元にしつつ2020年度版に再構成し、実践することができた。図画工作専修・ゼミにおける普段のゼミ活動と八千代の丘美術館でのワークショップとを有機的に連動させることができた。対面授業の実施が難しい時期であったが、ささやかではあるが図画工作専修・ゼミ内においても学年を越えたつながりが生まれた。ワークショップ当日に参加できなかった学生も、通常のゼミ活動において制作を体験し、学びを共有することができた<sup>註6)</sup>。ワークショップ終了後には、八千代の丘美術館職員の方の手によって当日の写真に掲載した資料を作成して頂き、美術館受付の壁面に掲示して頂いた<sup>資料5)</sup>。このことも、次の取組への意欲向上につながった。



【資料5：八千代の丘美術館作成「身近な材料でフクロウをつくろう!!」の掲示資料】

筆者は、これまでもありふれた身近な材料（身辺材）を用いた造形活動を介しながら、地域と大学、理論と実践、授業と教育・保育実習、教育・保育実習と教育・保育の現場、美術教育と環境教育との架橋を実現できるよう模索している。特に2020年度（令和2年度）では、美術作家・美術教育実践家の2側面から安芸高田市立八千代の丘美術館とのコラボレーション・ワークショップを3回に渡って行った<sup>註7)</sup>。図工ワークショップの実践を通して、スタッフである図画工作専修・ゼミの学生の実践的研究に寄与できるだけでなく、教育者・保育者としての資質・能力の向上など、その成長も見込まれると考えており、これまでの報告において成果と課題について継続的に言及してきた。図工ワークショップが様々なつながりを生み出すものと筆者は考えるため、学生とともに可能な範囲で地道に継続したいと考える。図工ワークショップ開催が危ぶまれるような状況が続いているが、安全に気を配りながら関係各位と連携を取り、今後も歩を進めていきたい。

#### 謝辞

学外の図工ワークショップにご参加の皆様、ご支援・ご協力くださいました安芸高田市立八千代の丘美術館様、南観音公民館様、初等教育学科・教育学科、関係各位に心より感謝いたします。とりわけワークショップの機会を与えてくださり、企画・運営に協力して下さった八千代の丘美術館館長・中土居正記様、八千代の丘美術館社会教育指導員・堀越ひとみ様、八千代の丘美術館社会教育指導員・山中りさ子様、八千代の丘美術館前館長・楨原慶喜様に深く感謝いたします。新型コロナウイルスの影響によりワークショップ開催は実現できませんでしたが、マリーエイド・サードテラス関係者様、南観音公民館館長・石原聖志様、南観音公民館専門員・竹本綾子様にも感謝いたします。本当にありがとうございました。

#### 参考文献

- ・新野貴則・福岡知子編著『明日の小学校教諭を目指して子どもの資質・能力を育む 図画工作科教育法』

萌文書林、令和元年

- ・安芸高田市立八千代の丘美術館『安芸高田市立八千代の丘美術館 開設10周年記念 入館作家寄贈作品図録』安芸高田市教育委員会、平成24年
- ・内野 務『造形素材にくわしい本 子どもが見つめる創造回路』日本文教出版、平成28年

## 引用文献

- ・引用1) 安芸高田市立八千代の丘美術館『安芸高田市立八千代の丘美術館 入館作家所蔵作品展 第1～17期 2001～2019』安芸高田市教育委員会、令和元年、p. 1。
- ・引用2) 前掲書1、p. 3。

## 註

- 1) 本稿では、筆者のゼミ学生を図画工作専修・ゼミ学生と表記した。正確には、2年生は児童教育コース図画工作科教育学ゼミと幼児教育コース領域造形表現ゼミ、3・4年生は児童教育コース図画工作専修と幼児教育コース図画工作ゼミである。
- 2) 佐伯育郎「つながりを生み出す図工ワークショップの実践と考察Ⅰ—2019年度の実践を中心に—」(『広島文教教育 第34巻』広島文教女子大学、令和元年、pp. 35-50)。
- 3) 2020年度は、表9のように2007年度から毎年行ってきた学内における図工ワークショップは開催しなかった。表9にある2010年度の題材ツリースを取り上げ、冬祭りのワークショップに向けて改訂を行った。2020年5月には2019年度にお世話になった広島市中区三河町にあるブライダル・カフェ、マリーエイド・サードテラスにおいても母の日に向けた図工ワークショップを予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、残念ながら中止となった。2020年12月には、広島市の南観音公民館においても図工ワークショップ1回、ミニクリスマス会1回を予定していたが、これらも中止となった。南観音公民館の参加者が保護者同伴の乳幼児中心であることが想定されたため、八千代の丘美術館の題材であるツリース(2010年度・学内ワークショップの題材)を、更に改良した写真17のような紙皿ツリースを参加者に作って頂く予定であった。貼る工程だけで完成させることができる簡易なものであった。対象となる保護者と乳幼児には制作して頂くことはできなかったが、その代わり図画工作専修・ゼミの学生に体験させることはできた(写真18・19・20)。4年生の指導の下、普段のゼミ活動において、2・3年生に紙皿ツリースの制作を体験させることはでき、お互いの学びになった。



【写真17: 紙皿ツリース (図工専修ゼミ・4年生による参考作品)】



【写真18・19・20: 紙皿ツリース (図工専修・ゼミ2・3年生による作品)】

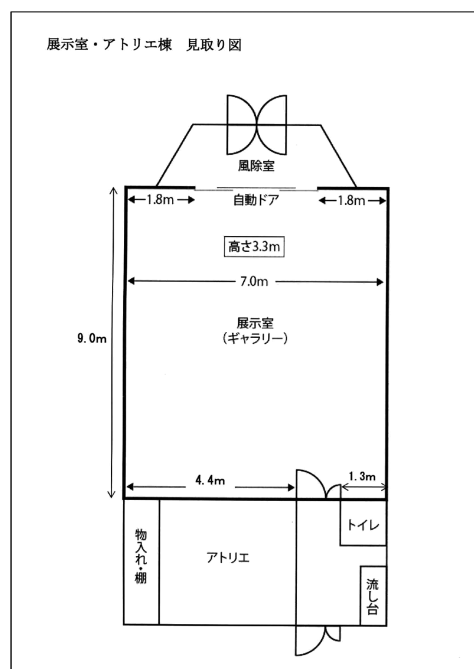
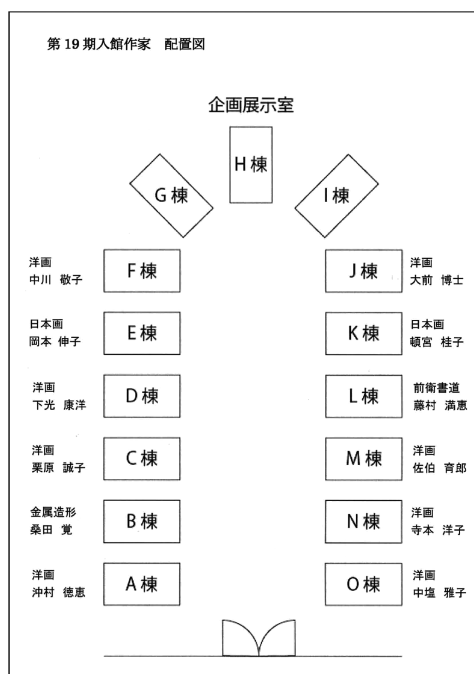


【表9：学内での図工ワークショップ一覧】

実施年度	題材〔タイプ〕 (モチーフ)	主材料にした身辺材	主な彩色・ 装飾方法
2007	アルミアート (魚)	アルミ缶	なし
2008	ハコニマル (トナカイ)	紙パック	ラッカー スプレー
	ランパック (ランプ)		
2009	ペットカー (生物・車)	ペットボトル ・ダンボール	ビニール テープ
2010	ツリース (クリスマスツリー)	ダンボール	色画用紙
2011	でこふれ (写真立て)	ダンボール	色画用紙
2012	ダンドール 〔スタンディングタ イプ・シッティン グタイプ〕 (サンタクロース)	ダンボール	色画用紙
2013	パッカウス (家)	紙パック・ ダンボール	色画用紙
2014	パッケーキ (ケーキ・スイーツ)	紙パック	色画用紙
2015	ダンドール 〔ハンギングタイプ〕 (アーティなど)	ダンボール	色画用紙
2016	パッカー (アートナカイ)	紙パック	色画用紙
2017	オシャブーツ (ブーツ・靴)	円筒状紙製 パッケージ	色画用紙
2018	シンドール・コ ビットモ (小人)	トイレッ ペーパーな どの芯	色画用紙
2019	マンネンダー (万年カレンダー)	ダンボール	色画用紙

4) 第19期入館作家の配置図、展示室・アトリエ棟見取り図は、以下の通りである。G・H・I棟は企画展示室という扱いであり、毎年数回に渡って特別展が開催されることになっている。

展示室・アトリエ棟には、作品を展示するギャラリーと、入館作家が自由に使ってよいアトリエがある。筆者は、この展示室において1期につき約20点の作品を陳列した。アトリエは、作品を保管するために使用していた。年間を通して、展示前の作品、展示後の作品、ワークショップで使用する材料・用具・参考作品の置き場として活用していた。大きなタッ

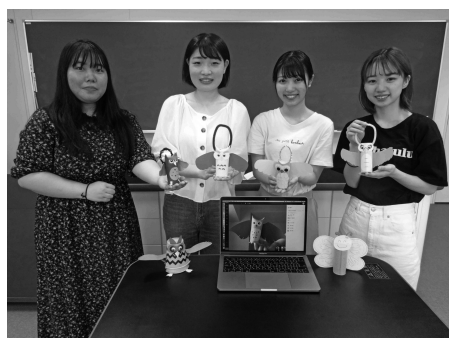


リーを制作する際にも、アトリエを使わせて頂いた。

5) 佐伯育郎「図工の教室『クリスマスをかざろう!』についての考察」(『広島文教教育 第25巻』広島文教女子大学、平成23年、pp. 53-66)。2010年度版ツリースと図工ワークショップでの取組については、拙稿において詳しく言及している。



6) 教育学研究Ⅱ、教科教育学演習Ⅳ、幼児教育学研究Ⅳにおいてワークショップの作品制作を行った。例えば、9月のワークショップに参加できなかった学生が、学内で以下のようにフクロウづくりを体験した。



【写真21・22・23・24：フクロウ（図工専修・ゼミ2・3年生による作品）】

7) これまでの学外での図工ワークショップを簡潔にまとめると、次の表10になる。学内ワークショップで実践した題材を流用したり、アレンジしたりして学外で実践してきた。美術館との架橋は経験済みであったが、2020年度（令和2年度）のように1年間に1つの美術館と複数回連携したのは今回が初めてであった。

【表10：学外での図工ワークショップ一覧】

実施時期	題 材	連携した 外部施設・団体等
2011年 8 月	ペットカー	広島県立美術館
2012年 8 月	アルミアート	広島県立美術館
2015年 8 月	ダンドール	みよし風土記の丘 ミュージアム
2017年 8 月	ダンドール	世羅町教育委員会 社会教育課
2019年 5 月	カーネーション	マリーエイド・ サードテラス
2019年 8 月	コビットモ （和風版）	ふくやま草戸千軒 ミュージアム
2020年 7 月	ポスター	安芸高田市立八千 代の丘美術館
2020年 9 月	フクロウ	安芸高田市立八千 代の丘美術館
2020年12月	ツリース （2020年度版）	安芸高田市立八千 代の丘美術館



【写真1：安芸高田市立八千代の丘美術館（広島県安芸高田市）】



【写真2：展示室におけるギャラリー・トーク（2シーズンでの様子）】



【写真3：「たのしくポスターを描こう」の作品（午前の部）】



【写真4：「たのしくポスターを描こう」の作品（午後の部）】



【写真5：学生によるフクロウの参考作品（幼教図工ゼミ3年生）】



【写真6：筆者によるフクロウの参考作品】



【写真7：「身近な材料でフクロウをつくろう!!」の様子】



【写真8：参加者によるフクロウの作品】





【写真9：参加者による写真撮影の様子】



【写真10：美術館中庭で撮影した参加者の作品】



【写真11：参加者・学生との記念写真（フクロウ）】



【写真12：2020年度版ツリース（学生の参考作品）】



【写真13：参加者によるツリース】



【写真14：大きなツリースに装飾をしている様子】



【写真15：展示室での大きなツリース・タツリーの点灯】



【写真16：参加者・学生との記念写真（ツリース）】